金達壽小說全集

一

金達寿小説全集

一

筑摩書房

金達寿小説全集一
一九八〇年六月二十日第一刷発行

著者　金達寿
発行者　布川角左衛門
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町三―八
電話　(営業)三九一―七六五一　(編集)三九四―七六一
振替　東京六―四三三
印刷所　三松堂
製本所　鈴木製本所
装幀者　田村義也

©一九八〇年　金達寿　0395-7-8001-4806

Printed in Japan

金達寿小説全集　第一巻

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

第一巻　目次

位置……7
おやじ……24
汽車弁……42
塵芥（ごみ）……63
雑草の如く……82
祖母の思い出……106
床屋にて……109
嘘をつく女……113
李万相と車桂流……121
八・一五以後……144
傷痕……162
司諫町五十七番地……178

華燭……199
濁酒の乾杯……215
番地のない部落……233
四斗樽の婆さん……259
判乱軍……272
大韓民国から来た男……318
崔永俊の抗議……351
矢の津峠……370
眼の色……393
解題……419
〈著者うしろがき〉わが文学と生活(三)『雄叫び』と『新生作家』……425

短編小説 I

位　置

築地の劇場で徹夜の舞台稽古見学を了えて、一人御徒町に居る棚網と引越しをするため、殺風景な早朝の、寒い秋葉原の長い階段を降りていた。

半ばまで降り立ったとき、下から歩いて来る制服を着た棚網が見えた。彼は僕を認めると駈け上って来る。

「昨日速達を出しておいた筈だが――」

棚網が傍で息を二つ三つ切るのを待って、僕が云った。

「うん見た、見た。今日は会社へいかないと具合が悪いんだ。済まないが俺の机の上に手紙を置いてある。荷物もちゃんと揃えてあるんだ。済まないが一人でやってくれないか」

「そう――。運送屋を未だ頼んでないんだが、君どこか心当りないか」

「ああよし、俺の会社の運送屋を頼んでやるよ。社へ行ったらすぐに寄越すから、俺の部屋で仕度して待っていてくれや。頼む」

と云って、彼を手は振り上げると階段を上り出した。

「会社へ行くのに制服かい」

「ああ」

彼は一寸振返り、すぐばたばたと構内に見えなくなった。

棚網は、僕と同じ学校の夜間部の法科に通っていると云っていた。彼と知り合ったのは、校友会雑誌のような文芸雑誌を夜間部の学生をも募集して出すことになったとき、彼が入って来たのであった。彼と一緒にアパートを借りて自炊をやろうということになったのは、僕が彼の部屋に三度目に遊びに行ったとき、彼が一升壜を一本買って来て、一緒に行った岩本と飲んでからだった。その時彼は僕の肩を力まかせに叩きながら、

「おい大沢！　観念的になるな、俺は何とも思っちゃいないんだからなあ」

と、繰り返していた。始め僕は何を云っているのか解らなかった。三、四度目に解った。

僕がひょんな事から或る団体の機関雑誌に雑文を掲せたとき、ある友人の作中人物の名を借りて大沢輝男と云う名を筆名にしたのだった。それ以来、友人達は話し合ったように本名の張応瑞(チャンウンス)を呼ばずに、その筆名を呼び名にしていた。

棚網の云う事は、お前が朝鮮人であることを気にするな、と云うのであった。彼は勿論好意から云うのであったろうが、却ってそれがその場では僕を意識的にさせた。

僕は、日本で生れ日本で教育を受けて来たので、朝鮮語は殆んどといっていい程知らず、もちろん彼地の風俗も知らない。そのためか、学校でも友達の全部は日本人であり、またその交際の上でも自分が朝鮮人であるとかいうようなことは意識されなかった。ともかく、棚網の云うことは好意からであるに違いなかった。

彼も、一人で居るのは淋しい、だから喫茶店などに出入するようになり勉強にもならず、食堂の飯は栄養も悪いから、と云っていた。僕は彼とは反対に、大井町の康(カング)の家で一つ部屋に四人も寝るのが繁雑になって来て仕方がなかった。

それで、棚網と一緒に駒込辺に部屋の空いているアパートを一日探し廻ったが、その日はなかった。そして二人は共に心懸けることにして別れたのだった。翌日学校で、僕は田端のアパートに居るという和泉に部屋探しのことを話すと、彼の居るアパートに空いた部屋があると思うから、今晩、築地の劇場見学へ一緒に行くことにして寄って見ろ、と云った。それで学校が了って和泉と一緒に行き、幸い空いていた部屋を契約して、棚網に明日引越すから会社は休んで待っていて呉れと速達を出しておいたのだった。

棚網の部屋へ上って見ると、柳行李が二つ机にのせてあり、部屋の真中には蒲団を丸めて放り出してあった。行李を縛った綱の間に紙切れが挿んである。僕は蒲団の上に腰を下ろしてそれを執った。

都合が悪いので、済まぬが一人で荷物を運んで呉れ。それから先月分の部屋代を払ってない。済まぬが十円だから払っておいて呉れ。

と書いてあった。僕はその紙切れを丸めて放り捨てた。

間もなく、誰方ですかと云ってこの家の主人が上って来た。僕は未だ月始めだったので、手をつけない七十円の中から十円を払ってやった。

蒲団の上に坐っていると、徹夜の疲れが一時に出て来た。行李に頭を当ててうとうとしていると、運送屋がやって来た。

荷物は棚網のを運んでから、大井町の僕の物を運んだ。

漸くそれぞれの位置に机や本箱を置いてみると四畳半の部屋は狭い。僕は本を大分持っていた。棚網は小説類が五、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

六冊しかなかったので、それは彼の机の上で間に合った。僕の本棚は小さい浅い床の間があったのでそこへ入れると丁度合った。この床の間を中にして二人の机を並べた。僕は窓辺の位置が欲しかったが、本人も居なかったし、礼儀として窓辺は彼に譲った。

アパートは始めてだったので、畳の半分位ずつの広さで三和土、押入、台所と設備されているのが珍らしかった。四角な、僕の体一つで一杯の台所に入って手を洗っていると、下の管理のおばさんが上って来て挨拶と共に電話がかかって来たと告げた。入ったばかりで電話が掛って来たということが、気が引けた。さも電話の無い家に居て電話を使いたくて耐らぬように思われるようでいやだった。管理人のおばさんの雀斑顔の笑いが、そう感じられた。

事務所の窓口に出ている受話器を執ると、棚網の声だった。いま田端の駅に居るが道がよく解らぬから来てくれと云う。昨日の速達で詳しく道順の地図まで書いてやったのに、——ちょっと不快を感じた。駅から一本道路だと道順を云っても、面倒だからすぐ来いと云う。事務所の人の手前もあって受話器を掛け、出掛けることにした。

駅の前に花鉢を積んだ車を止めて印半纏を着た男が花鉢を売っていた。往き来の女達が自分の荷物を脇に抱え、あれこれ執り上げていた。棚網は二間ばかり離れたところで電信柱を背にして、花の鉢を一つ持って花屋の方を瞶めて立っている。

僕が来たのに気づくと、持っていた花の鉢を僕に持たせながら笑う。

「やあ済まん。これを一つ買った。安いぜ二十銭だよ」

「さあ行こう、色々と炊事道具も買わなけりゃならないし、未だ片づけたりしなけりゃならないんだ」

アパートの前まで来て、彼に部屋を指差して教え、

「花の鉢を置いて金を持って来るから、この通りを抜けると金物屋や瀬戸物屋が並んでいるそうだ。必要品を買っていてくれ」

「うん、よしよし、なるべく安く買う」

彼は云って、前の細い道路を買物に出た内儀さん達に混って制服姿で入って行く。

ニュームの釜から味噌や何かに至るまで買い込んだ。みんなで十円余りであった。早速前の米屋から五升の米を取寄せて飯を炊いた。

「葱だとか味噌や何かは俺が会社から帰りに買って来てやるよ。大沢はそういうものの買い方が下手だなあ、一度見るとすぐ解るよ」

前の人が未だ居ると思ってか、知らぬ間に入れていった夕刊を見ながら棚網は、台所で働いている僕に云った。

「飯は炊いたことがあるが、そういうものはあまり買ったことがないんだ。頼むよ」
「ああ、いいとも」
と云って暫く新聞を見ているようだったが、急に頭を上げると、
「大沢！……俺達が一緒に居るからには互いに秘密があっちゃ厭だろう」
と云って、眼を新聞に持って行く。
「そうだろうね、よくないだろう。僕には別にないぜ、君に打明ける性質のものは」
僕は、炊けた釜を畳の上に持って来ながら云った。
「いや俺にはあるんだ。まあ寝る時話すよ、寝物語っていうやつだ、アッハハハ」
彼は顔を上げて笑う。
「そうかい。それじゃ楽しみにしているよ」
自分で炊いた飯だからか、旨かった。棚網も随分食べた。米を茶碗に山盛りに二杯炊いたものが足りないくらいだった。
飯を喰べ了って、棚網が後片づけしている間、僕は煙草をくわえて下の八号室の和泉のところへ行った。
彼は寝ていた。
「いま引越しを了えたんですよ、早速来ました」
「やあ。——もう来たのかね、手伝わなくてわるいね。何しろ昨日の徹夜で睡くてね、君はよく我慢出来るなあ」
と云いながら、彼は、蒲団の上に半身を起す。
「いや寝ていて下さい。お蔭で部屋は助かりました。今後とも迷惑をかけます」
と、僕は坐りながら頭を下げた。
彼とは、研究会等で近頃話し合うようになっていた。彼は競馬や麻雀で学校は余り出て来ない。従って落第をしつづけていた。それが近頃になって同棲していた女とは別れたとかで、学校は週に二、三度は出ている。
「やあ、こちらこそ……。二人で居るんだってね……」
「ええ、棚網という友人とです」
と返辞をしたが、何か置き忘れたような感じがした。
彼の言葉の響きで、僕は棚網が日本人である事を云う必要を感じた。そして彼も僕の返辞にそれを期待していたようだった。互いに自分の考えの的中を恐れているような沈黙があった。と云って、云いそびれたのを今更彼は日本人ですよと云うのは変だった。
すると彼の方で云った。
「で、何かい。その、矢張り同じ郷里の人かい」
と云って彼は、威勢よく蒲団を蹴って起き上った。
「いいえ、日本人ですよ。群馬県の生れですよ。アッハハ

ハ」
僕は、机に居ざり寄りながら笑った。
和泉の顔は見えぬが、ほっと安心したような気配が感じられた。
「そう、沢山居るとうるさいからね。君はちっとも解らないよ、言葉などは寧ろ日本人以上だよ」
「そうですか。アッハハハ」
僕はわざと快活に笑って見せた。自分の心の裡から湧き上ろうとするある淋しさを打消すように。
和泉は台所へ入って、顔を洗っている。
「火がおきてますから、来ませんか」
「有難う、一緒に行こう。女房が居らんと駄目だね」
「淋しいでしょう」
茶簞笥の上に鏡台が置いてあり、女の残して行ったものらしい油の空壜等がちらばっている。
「近いうちに帰って来るには来るがね」
彼は頭で撫でつつ、台所から出て来た。
和泉を連れて部屋へ戻って来ると、棚網は雑巾で自分の机を拭いていた。机の隅には花の鉢が綺麗にのせてある。
僕は二人を紹介した。
「棚網喜作という者です。群馬県の生れです」
「ああ、和泉です」
和泉は立ったままで云うと、部屋を見廻す。棚網は彼の顔を見上げている。
「まあ坐りませんか」
僕が云った。
「ああ」
と和泉は机にもたれ寄って、出した湯を啜ると立ち上って、
「隣の大石さんの部屋に居るから。昨夜紹介した人だ、遊びに来給え」
と云って出て行った。
「いやに横柄な奴じゃないか」
棚網は、和泉の後姿から顔を戻すと云った。
「まあ、そのうちに仲よくなるさ」
「何だい学生じゃないのかい、同じ学生だろう」
棚網はすこしむきになったように早口で喋る。
「いや学生も学生、おお（大）学生だよ」
僕は冷かし加減で笑った。
「何だかお前（めい）の云う事解らねえや、一体何者だい」
棚網は云っておいて、顔をそむける。僕はお前（めい）という言葉で、彼の顔を見返した。
「そのうちに解るさ。まあ、これからの相談でもしようじゃないか」

「あ、――俺の部屋代払って呉れた？　運賃は幾許だったい」
彼は素直な声を出した。
「運賃は十二円だった。部屋代は払ったよ。これからノートを作って置いておのおの一日一日費った分を記入するんだ。そして月末に勘定する。金の事についてはお互いにきれいにやって行こう。誤解のうまれぬように。君も一銭でも記けてくれ」
僕は古いノートを出した。
棚網は肯きながら、ノートに線を引いて二人の名前と月日を書込んだ。そして自分の名前の下に二十銭也と書く。花の鉢の代金である。僕は自分の名の下に金額を書こうとして、ペンを持って費った金を勘定していた。
「大沢の費ったのは、部屋代が十円の運賃が十二円とそれから釜など買ったのが十円三十八銭と……合計三十二円三十八銭だ」
と棚網が云う。
「そう、じゃそれにここの部屋代が二十円と……」
僕は彼の部屋代の十円について一寸迷ったが、まあそのうちに気がついて云うだろうと思って彼の云う額を記入した。
「俺の方はどうせ大沢に食わして貰うから、帳面は余り用がないわけだ。アッハハハ」
棚網は帳面を覗込んで云った。
僕は少し笑顔を見せて、起ち上った。
「隣の大石さんとこへ行ってみよう、僕等の学校の法科の先輩だよ」
「ええ！　法科の？　幾歳位の人だい？」
「三十位だろう、君も法科だったね」
「うん、しかし俺は夜間だから知らないだろう――」
大石さんの部屋をノックして開けると、和泉が入口の方に足を投げて寝ころんでいた。大石さんは、ギッシリ一杯詰まった二つの本棚を後ろにして新聞を読んでいた。
「今日早速やって来ました。どうぞよろしくお願い致します」
僕は挨拶をして坐った。
「こちらこそ頼みます」
大石さんは云いながら起って、戸棚から坐蒲団を二枚出す。
「おい、紹介しろよ」
と、棚網が後ろに坐って突っつく。
「大石さん、今度一緒に居ることになった棚網君です」
僕は大石さんの坐るのを待って、云った。
「僕、棚網喜作です。先祖は竹中半兵衛です」

棚網は両手をついてお辞儀をする。
「大石です。こちらこそ。法律科ですか」
大石さんは棚網の襟章を見て云う。
「ええそうです。先輩でいらっしゃるそうですがその点でもどうぞ——」
棚網は、揉手をしながら云っている。
和泉は寝たままニヤニヤしていた。棚網は先刻和泉の時は生地を云い、今度は大石さんには先祖を云った。共に僕は不自然を感じた。だが、すぐに、彼が日本人である事を知らす為に云ったようだと解った。
学校の事など話題に出したが、始めてであるためか型通りの話しか出なかった。大石さんが自ら淹れて出すお茶など喫んで和泉を残して出て来た。
「一本飲みに行こうか。この辺に面白そうなところがありそうじゃないか」
棚網は大石さんの部屋の扉を閉めると、云った。
「今夜は早く寝たいんだ。何しろ昨夜徹夜だったからね。またにしようじゃないか」
「そうか。昨夜一体何だったんだい」
「舞台稽古の見学だったんだ。研究会の」
僕は窓を開けて置いて、押入から蒲団を出した。
二人の蒲団を出すと部屋一杯だった。棚網は上下二枚とその他のうすい掻巻を持っていた。
「大沢は四枚も持っているのか。一枚寄越せよ、敷蒲団でいいや。この部屋は寒そうだ」
「それだけじゃ寒いだろう。僕は一枚敷くから、敷蒲団でいいなら使えよ」
「有難う。郷里から送ると云って来たのを断ったんだ。向うの部屋は割合暖かったからね」
「さあどう敷いたもんかな。——あ、君は朝先きに起きて飯を炊くから台所側で寝てくれ」
と僕は蒲団を摑んで云うと、彼は暫く黙って考える風をしていたが、
「窓の方へ頭をやろう。ええと、俺は端の方は嫌いなんだ」
と云った。
「そう。じゃ僕が寝よう」
僕の蒲団は頭が台所になり、足が入口になった。
蒲団に入ってみると俄かに疲れが出て来た。棚網は敷蒲団に、手拭を縫い合した敷布をのばしていた。
「俺の告白をしようか」
彼は服を脱ぎながら云う。
「うん聞かして貰おうか」
「じゃ電気を消すぜ」

棚網は電気を消して、腰の辺りを掻きながら寝床に入って腹這いになると煙草に火を点ける。頭越しに街頭の灯が窓から差込んでいて、向いの壁に硝子窓が描き出された。棚網の吹き出す煙草の煙が線を引いて上る。

「実はね大沢——」

彼はゆっくりこう云うと、煙草をもみ消して仰向けになった。

「俺は大学へ行ってないんだよ」

と彼はポツリと云った。

僕は一寸吃驚したが、何気ない風を装った。

「ほう、じゃ法科へ行っているというのは嘘か」

「一緒に居るからどうせ解ることだ。本当のことを云うが、誰にも云ってくれるなよな」

「言っても仕方のない事じゃないか、そんなこと」

「親父の手前文科へ行かれず、法科へ行っているといったが、あれはどっちも嘘なんだ」

と、しばらく彼はモゾモゾ身体を動かしていたが、

「実は俺の友達が一人法科へ行っている奴があるんだ。そいつに従いて大学というものを見せて貰いたいと思って、或日一緒に学校へ行ったんだ。くだらないものだったが、それでも中学を卒業しているなら専門部へでも入ろうかと思ったが、高等小学校しか出てないから駄目だそうだ」

僕は、壁の影が揺れ動くのを見ていた。彼は僕の顔を時時覗くようにして話している。

「そこで例のあの雑誌の募集の広告を見たんだ。それが大沢の書いたものだったわけだ」

と彼は笑いながら、頭を擡げて僕を見る。僕は横顔で笑いに応えて見せた。

「その雑誌の同人になる為には学生じゃなけりゃ具合が悪いと思ったんだ。大沢は解っているが、他の奴等は大学へ行ってなくちゃ文学を解らないと思っていやがるからなあ。行かない俺も大学へ行っている奴等も、どっちもどっちじゃないか、くだらない奴等ばかりじゃないか。尤も大沢は違うがね——。それで制服を買ったよ。それからはどうせ買ったのだし、制服の方が簡単だから今でも着ているんだ」

「そう——。何だい、それが告白だったのかい」

と、僕は、快活そうに云った。

「うん、そうなんだ。他の奴等には云うなよな、文学をやるのに学校へ行っていたって、行ってなくたって異うところはないんだろう、ええ」

押しつけるように云う。

「うん。そうさ」

「俺は小説の勉強は随分長くしているんだ。十六の時から

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com